



## 古代の地名について(5)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道学芸大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 栗原, 薫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00001015">https://doi.org/10.32150/00001015</a>

## 古代の地名について（5）

栗 原 薫

北海道学芸大学旭川分校歴史研究室

Kaoru KURIHARA : On Ancient Geographical Names (5)

## 目 次

1 秦氏の名及び幡羅郡	4 平安京及平城京
2 相模国	5 上枚郷、下枚郷及び阿倍比羅夫
3 欽明天皇金刺宮と金屋	6 西寒多神社

## 秦氏の名及び幡羅郡

験の杉（伴信友著）によれば、秦公伊呂俱が稲荷神社を祭り始めたと山城国風土記にあり、稲荷神社は秦氏が祭つて来た神社であつた。後程其の稲荷神社の神職が秦と荷田の二家となつたのは、荷田と秦とが元来同じ名の別の発音の仕方である事が考えられていたのではあるまいか。

三代実録貞観四年正月七日等に見える蕃良朝臣は、ハラであるが、蕃の字に音を示す以上の意味があるとすれば、はらは元来からと同一の語の別の発音の仕方ではあるまいか。新撰姓氏録考証によれば、続後紀に蕃良朝臣は承和元年葛井宿禰石雄、同姓鮎川が賜つた姓であるとあり、葛井朝臣は新撰姓氏録に、百済国都慕王の子孫であると出ている。からとよばれて悪い血統では無い。からの別系の発音はらに蕃の字を宛てたのではあるまいか。

延喜式卷二十二民部上に武蔵国幡羅郡とある郡は、卷九神名上では幡羅郡になつて居り、和名抄では民部式と同じく幡羅郡である。延喜式では皆ハラと傍訓が附せられ、和名抄は原と註がついている。

唯国史小辞典所載郡名考では、この郡名の読み方はハタラになつて居る。幡羅はハタラとよめるし、下にのべる意に解すれば意味がよく通るので、ハタラが元来の名で、ハタラのタが省略された名がハラなのかもしれぬ。

同郡では、上秦、下秦、幡羅の諸郷が和名抄にのせられていて、秦氏にゆかりのあつた郡だつたかに思われる。

ハタラのハタは秦氏の秦であろう。

又同時にハタラのハは漢の字の音 han で、タラは梁書百済国伝にのせられている百済ではシナの郡県を担魯と言うと云う記事の担魯＝タロ＝タラで、両方がむすびつき、漢人の郡県の意味のハンタラとなり、その発音が落ちてハタラになつたのではあるまいか。

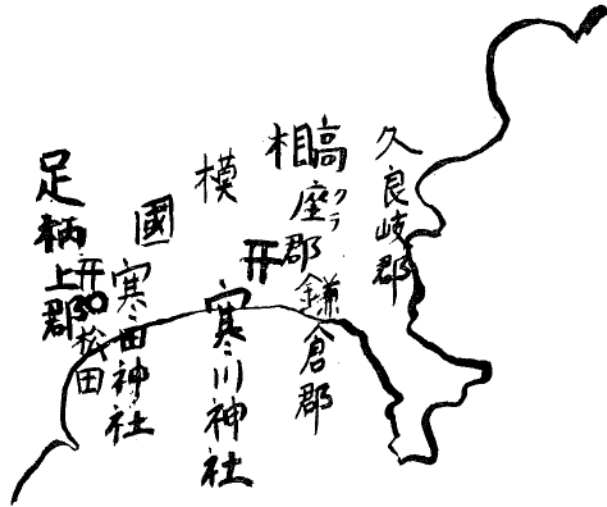
漢音喉音のhは国語のカ行音で書き表されたとして居るが、それは漢語、漢字が日本語に広くとり入れられ日常化しかける以前にも、機械的に喉音hがkと聞きとられカ行音として書き残されたとばかりは言えない。いわば奈良時代より更に古い時代の事については喉音h=kとは言

及 幡  
寒田神社  
羅 郡



甲斐國

足柄嶽  
駿河國



い切れまい。ましてhとkを使い分けられたシナ系の帰化人が次第に日本化するに当つて、その個有名詞の如きはどの様に固定したか一様には言えまい。元来の喉音hをかとしたりはにしたりしながら後までほと言つているのをかと言いかえても同じだという様な 伝承を残したのではあるまいか。

このハタラが一方では幡羅郡=播羅郡になり、一方ではラが落ちてハタになつたのではあるまいか。

つまり播羅も秦も漢の郡の意になり、高麗郡、百濟郡等に相対する名となる。

(好太王碑に加多羅とはほぼ同一地域をさしていると思われる加羅谷の地名があり、韓語では多羅と羅の等しい例を示している。ハタ氏はシナ人だが半島に長くいたので韓語にも習熟していたのであろう。

ハタラのラが落ちたのは複数の意のラを軽くそえる事があるのと同様に受けとつて逆にとつたのかもしれない。)

三品彰英先生は日本書紀朝鮮関係記事考証上巻で、秦氏の出自を元來は秦の字は当字に過ぎな

## 古代の地名について(5)

かつたのが、姓氏録に至つて秦始皇帝に結びつけられていて、秦帝の子孫という伝承は案外新しい時代の構成だとされているが、ハタの意味をかく解すると、ハタ氏は漢の系統という事になり名称の上からも三品先生の説を裏付ける事になる。

地名には土佐国幡多郡等ハタとよぶ地名が多いが、大ていは秦氏ゆかりの地名であろう。カタの方は河内国交野郡、上野国片岡郡、讃岐国刈田郡等があるが、カラに関わる名かどうかはつきりしない。片岡郡には若田郷があり(和名抄)、若田郷はワ+カタ郷ともとれるから、カタと結びつく名なのかもしれぬ。筑前国宗像郡の宗像は宗像神社が鎮座し給うからであるが、その宗像は主+カタ=漢人又は韓人の郡県の意味ではあるまいか。古事記に筑紫の国を白日別と言うとあるのは、筑紫国は、新羅を神秘的な力で支配する人の治める国を意味する白日別と言うの意ともとれる。宗像も白日別と似た意味かもしれぬ。主要な朝鮮半島の漢人、韓人の郡県を支配する神の社の意ともとれる。(主県かもしれぬが)

(若田=ワカタはハカタ=端カタの意ではあるまいか。九州の博多も端カタかもしれぬ。)

## 相 模 国

相模国名について、古事記伝には相模は、和名抄に佐加三とあるが元は佐賀牟であつた、佐賀牟の意味は未だ考え得ずとし、更に佐斯上の斯を省いたのだらうと試みに云い、凡て上神などを加牟と云うは、下に言のつくときのことなれば、此国名も佐賀牟と云うは、もと佐賀牟の国、佐賀牟の小野など連言うときの唱えだらうかとしている。

古事記伝では武蔵を主佐斯とし佐斯国を主と上にわけた名と試みに言つているのであるが、古事記では国名等上つ毛郡、下つ毛野君、吉備の上道の臣、吉備の下道の臣、上つ菟上の国の造、下つ菟上の国造等二つに分けて一方を上すれば他方は下であつて、むねとかみは特殊になる。

もし相模=佐賀牟の賀牟を神と解すれば、武蔵を相模の対とし主要部分と上半分の意に解するのがやや特異に思われるのを解決できはしまいか。神にすれば、主とか下とかの国が無くてよいからである。

佐斯の方は韓語の城の意のさしたとできぬことも無いが、武蔵の字の蔵が案外佐斯の意を示しているのもしれぬ。同国に久良郡などがあるのを見ると猶そうも思える。別述金刺宮の刺も城というより蔵の方がよくあてはまりそうだ。又城と蔵は無縁の語では無く、城を意味していたものが、蔵をも意味する様になる事はあり得る事である。

しかし武蔵のしを島の意(筑紫、高志等に対するもので一地方の意味、対になり同時につけられたとも考えらる)に解し(拙稿北海道学芸大学紀要十一卷一、二号 古代に於ける神社の研究)むさのさを猿の意にとれぬ事もあるまい。相模のさも猿の意にも解し得ると思う(下総国猿島郡を延喜式民部上の傍訓にサしてにしてある。猿+何々の猿をサとよんでよいと思う)。つまり相模の名は猿神になるわけである。

別に論ずるが如く、相模国の寒田神社、寒川神社の寒は猿かと思われるので、猿神国と名づけられるのもあまり無理では無いかもしれない。交通に関わる神として各地に猿が祭られているが相模国も関東地方に出る交通の要地で足柄時のある地方だから、猿神が意識される事が特に強かつたのもあろうか。(寒田神社は足柄時に近く祭られている。)

## 欽明天皇金刺宮と金屋

欽明天皇は磯城嶋の金刺宮に居給うた。

この金刺は韓語ではあるまいか。

金は韓語ではナ、ラは相通じ用いるので、カナ=カラなのであろう。

刺の方は日本語化した韓語で城の意であらう。相模の所でのべた様に倉位の意長かもしれぬ。

両方合せてからの城又は倉であり、からの城(倉)の宮であらう。

欽明天皇は三韓経営に殊の外努力された天皇であり、継体天皇の御代より朝鮮半島方面が頗るさわがしかつたので、朝鮮半島への関心から自らの宮にその様な名を付け給うたのであろう。

欽明紀の大葉子の韓国の城の辺に立ちてと言う歌などとも並ぶ名前であらう。その様な歌を伝承せしめた力が一方ではその様な名をつけしめ残さしめたのであろう。

それは一つの世界精神であり、又その世界を統べて行く天皇の自覚であらう。

金刺と名乗る氏姓が信濃や駿河等に居たのは、上古のその様な精神の別の現われである。

金刺宮の後は金屋(大三輪町内)の地名となつて残っている。

寺間の名が大屋となつた例があり、寺とか城とかを皆屋とも言つたらしい。

(サシはアイヌ語のチャシ=城とも関わりがあるかもしれぬ。チャシは城丈で無く、他の公共の場所を言う事もあつたらしい。館位の意味かもしれぬ。

北海道松山支庁管内の江差のサシはチャシではあるまいか。陸中の江刺郡もそうかもしれぬ。)

#### 平安京及平城京

日本紀略に延暦十三年十一月丁丑、詔、云々、山勢実合前聞、云々、此国山河襟帯、自然作城、因斯形勝、可制新号、宜改山背国、為山城国、又子来之民、讴歌之輩、異口同辞、号曰平安京…とあるが、これによると、延暦十二年平安京を造営しはじめてまもなく民衆が新都を平安京恐らくはたいらのみやことよびはじめたので、後公にも平安京と称せられるに至つたのである。

ここにたいらとは世のおだやかなと言う意味であらうが、たいらと言う言葉そのものには平坦の意がある。

さて平城京の名はならという地名が元来あつたのを漢訳してつけたものである。

ならの名は、古事記歌謡に、仁徳天皇の御代に石の日売の命が、山代よりめぐりて、那良の山口に到りまして、歌よみしたもうて、つぎねふや 山代河を 宮上り 吾がのほれば あをによし 那良を過ぎ 云々と歌よみし給うたものがあり、又同じく弟王との争いに敗れた大山守の命が那良山に葬られたとある。

古事記の書かれたのは和銅五年で平城に都の遷された和銅三年より二年後で、平城建郡の詔勅の出た和銅元年より四年あとだが、古事記は天武天皇が稗田阿礼に誦み習わしめ給うた所を撰録したのであるから、ならの地名は平城以前からあつたものである。

日本書紀崇神巻には、崇神天皇が反乱した埴安彦を撃ち給うのに、官軍が那羅山に登つて草木をふみならした。そこで那羅山と言うのだとある。当時にかんがえられていた地名の由来であるが、元来は平坦の意だつたのかもしれない。

柳田国男氏の地名の研究に山中で少しく平らな所をナル、ナロと呼ぶ。ナラスと云うことで、大和の奈良を平城と書くのも同じことであるとある。

ナルは中国地方で使われ、伯耆国大山山麓の鏡ヶ成などの例がある。

これに対し、東国では似た所を平=たいらとよぶ。駿河国久能山麓の日本平等の例がある。

柳田氏の説をとると、平城の名も平安の名も漢字名が似ている様に、その意味も同じ山中の平らかな土地の意味をもつて居り、その間連続性が見られる。

たつて言えば、平城が平安に都を定めるに功のあつた和氣の清麻呂の本拠の中国地方系の名であるのに、長岡京造営に力をいたし、平安京造営にも功のあつた藤原氏とゆかりの深かつた東国系の名が平安である事である。

和氣清麻呂伝によれば清麻呂は天皇に潜奏し遊獵に託して天皇に葛野地を相し遷都する様にさせ奉つた、更に藤原小黒麻呂が延暦十三年七月死んでから造宮大夫になり死に至つた。

又藤原小黒麻呂は死ぬ迄造宮大夫となり、その子葛野麻呂は新京の宅忌を班給する仕事をしている（延暦十二年九月戊寅二日）。喜田貞吉氏の「帝都」は小黒麻呂は秦志寸島磨の娘を妻として居り、秦氏の経済力を利用して新都の造営にあつたのだらうとしている。「帝都」は清麻呂は彼が秦氏の経済力を利用出来るのに目をつけ、新都造営にあたる様はからつたのだらうとしている。）

日本紀略によれば延暦十二年三同庚寅（十二日）、五位已上及諸司主典已上をして役夫を進め新京宮城を築かしめている。

五位は資人を給う最下級の位であるから資人を役夫に出すのかとも思われるが、主典已上というのは資人賜与の範囲をはるかに出ていて、これはむしろ夫々の私的な関係を通じ動員出来る役夫を進めさせたと言う意味であろう。横田健一氏が指摘された様に和氣氏等各氏族は氏族的な団結をかなり強固にむすんでいたのだから、その様な氏族組織を通じて役夫を動員する事も出来たであろう。長年に及ぶ新都造営の失敗に苦しんだ後の造営であるから、私均な奉仕が特に期待されたのであろう。平安に都を造る事を定めた直後にこの役夫を進める事が令されたのは、かかる方法が重視される方針だつたのであろう。藤原氏が造宮大夫になる等有力だつたので、藤原氏とゆかり深い東国の人々が動員される事が多かつたのもあろうか。彼等を中心にならぬ名を同義のたいらに東国風に言いかえ、あわせて天下泰平の願いを示したのもあろうか。

奈良時代の政治的混乱をおさえ平らかな時代が期待された事がたいらの京の名の由来であつたろうが（例えば延暦十四年正月十六日には侍臣を宴し踏歌を奏し給うたが、その歌に新京樂、平安樂土、萬年春という句がくりかえされていた。）なおそこには名前の上でも奈良時代から平安時代へと連なる連続性が強くあつたのだと言わねばならない。

### 上枚郷、下枚郷及び阿倍比羅夫

古事記に猿田毘古の神が阿耶珂に坐した時に漁して比良夫貝にその手を啗い合されて海水に溺れ給うたとあるが、その比良夫貝について古事記伝は、古へ世に多かりし物とおほしくて、人ノ名に負る、書紀統紀に、いと数多見えたり、〔書紀に……………〕然るに和名抄などに見えざるは後に名の変れるにやあらん、今詳ならず〔……………志摩国の海辺の人に、此ノ貝の事問へるに、云く比良夫貝は、月日貝のことなり、此わたりの海に、いと稀にある物なり、とぞ云ける……………今（伊勢国）飯高郡の海辺に、平生と書て比良於と呼ッ村あり……………阿坂村より一里半ばかり東なり、これ若くは、古へは比良夫にて、此貝の此の故事より出でたる地名にはあらざるか、神風抄に、平生御厨とある処なり〕としている。（平生は今は獵師町平尾、大平尾と言う。）

ひらは現在では平たい碗を指すが、古典には出てこない。

唯地名には、和名抄に肥前国松浦郡庇羅郷、伊勢国飯高郡上枚、下枚兩郷がある。

此のひらは庇羅郷＝平戸島の地形から見て平たい土地と言う意味ではあるまいから、容器のひらに関わつていゝのではあるまいか。しかしひらと言う容器は古典には見られ無から、古事記



の天八十毘良迦，日本書紀の平瓮此云毘邈介，皇太神宮儀式帳の御比良加，神宮雜例集の天平賀，新撰字鏡の甗比良加，鏡……比良加奈戸，又古加奈戸，和名抄の盆注作瓮，弁色立成云比良加，鐘子注方言要目云比良賀奈倍等のひらか，ひらかなべに関わっているのではあるまいか。（又釈日本紀所引大神宮本紀の天八十枚加，同兼方案之。平賀）

ひらかは，箋注和名抄の盆の注に比良加の比良＝ひらは平でひらたい意味，加＝かは美賀（大甕），由賀（遊堀）の賀と同じだと説き大甕の注に美賀の賀は箭の訓の介と同じだといっているがひらかはその様な意味であろう。後世のひらはこれに由来する名であろうか。或は古代でもひらとのみ言う事があつたのかもしれない。ひらかなべはひらかのなべに使われたものであろう。なべのなはなら＝成＝平の意であろう。べは陶器の意であろう。（かが並べてと言ひ，ならべをなべとつづめる事がある。古事記中巻倭建命の物語）ひらかなべで同じ意味の言葉を二度重ねた事にもなる。!

ひらかは釈日本紀に神に供える物を盛る土器である。今の世，伊勢太神宮の御殿の下に多く安置してある。或は諸神参候之神座であると言われていたり，記紀等に出て居り，神を祭るの

に作られている。

古事記に、大国主命の国ゆずりの後、天皇の宮殿の様な、大国主命の宮殿を出雲国多芸志の小浜に作った時、海底の埴をとつて天の八十平瓮が作られたとある。

又崇神天皇の御代、伊迦賀色許男の命に仰せて、天の八十平瓮を作り、天つ神地つ祇の社を定めまつり給うたとある。

又日本書紀等に似た話が出ている。

神宮雜例集を見ると、内外宮の正殿の下に四百口以上が置かれていた。これは二十年に一度御遷宮の時、建物が作りかえられると共に、新に造り調べて供えまつつていたとある。

伊勢二所皇太神宮御座伝記及び豊受皇太神御鎮座本紀には天平賀は天神の訓にしたがい工師物忌の父が宇仁のはにを取つて天平瓮を作り諸神を敬祭するものである。宮別に八十口で心御柱の本並びに諸木の本に置く。是は天下泰平の吉瑞、諸神納受の宝器であると記している。

百練抄には、鳥羽院の元永二年九月六日に豊受太神宮の正殿の下の天平賀が流捐した事が記されている。

さて倭姫世紀に、倭姫命が伊勢に入り給うた時、阿佐賀々多(阿耶珂鴻、猿田彦神が比良夫貝に手を咋われ死んだ所であろう)を渡り給うた時、多氣連等の祖の宇加乃日子の子吉志比女、吉彦の二人が参つたので、汝等は何をあさつているかと御賀ねになつた。そこで二人は皇太神の御にえのなますに奉る始をあさつていると御答へした。そこで倭姫命はお前の言う事は恐れ多い事であるとのたまひ、其始を太神の御にえに進めしめ、佐々牟の木枝を割取り、火をきり出して、采女忍比売が作った天平瓮八十枚にのせて、いわい戸に仕奉つたとある。

釈日本紀所引大同元年太神宮本紀にも忍比売が天八十枚加を作つた事が出ている。

倭姫世紀では忍比売は尾張の中島宮に倭姫命が居給うた時、地口御田を奉り、その子継が天平瓮八十枚を作り奉つたとある。

この阿佐賀々多に当る所に上下枚郷があるが、更に尾張國中島郡平和町に平と言う大字が現在ある。又同中島郡には、神祇全書第一輯神名帳考証によると中庄姫振村に売夫神社があり埴安姫大咩布命をまつつていた。この神は伊香色雄命の子大綜杵命の孫である。この伊香色雄命は、古事記に崇神天皇の御代、伊迦賀色許男命に仰せて八十平瓮を作り、神の社を定めまつり給うたとある神と同一の神ではあるまいか。そうだとすると天平賀とゆかりある神社となる。別に埴安姫が祭られているのももつともなことである。ここに売夫の夫は比良夫貝の夫と同じで、品部の部ではあるまいか。(部はべともふとも言つた)売は忍比売の売で、比良は平賀の平で同じものを作つた人の名、作られたもの名に分けて言つていゝのではあるまいか。中島郡の方にも平の地名があるのであり、この枚、平の名は比良賀をさしているかに思われる。(姫振村は今平和町)

さて山城国相楽郡の名は古事記伝には懸木(佐賀理紀)の理と良、紀と加と通う音にて訛れるなり、サカラ、サハラは又訛れるなりとしている。和名抄に佐加良加とそのよみ方を注し、又書紀の注には欽明紀に左破良、敏達紀に左安良とあり、又傍訓にはサガラ、サハラとある。要するにサガラカとサガラが同一地名をさしているのである。

これを見るとひらかがひらになる事もありうらと思う。肥前国の庇羅郷も似た意味ではあるまいか。出羽国の平鹿郡は略さずそのまま言つた名であろう。

坂上系図の平方村主(阿智使主が三韓よりつれてきた漢人村主達の一種と同系図に記されている)のひらかたはひらあがた(平県)ではあるまいか。

河内国讃良郡枚岡郷はひらかを祭つた岡なのであろう。

又比良夫貝について言えば品部の部をふと言う事もあるので比良加部つまり比良加を作るを事とした部の事かもしれぬ。

上述売夫神社と並べて述べた如く、売夫と比良夫は対になっているが、其等は天平瓮に関わる部の意でもあろうか。

部は労働組織であるが、比良加にかかわつては別に該当するものが直接には見当ら無い。

唯神宮雜例集では、御器長兼下有爾村刀禰敢貞元の解し申す陳状〔仁安四年（1166年）〕に彼は天平賀役勤仕は敢氏相伝職だと述べている。

又前述土師物忌の父の記事と並び、豊受皇太神御鎮座本紀に天神之訓にしたがい土師氏を物忌職とし天平瓮諸土器類を作り供進するのだと述べている。

皇太神宮儀式帳には土師器作物忌及び其父と陶器作内人があげられ陶器を作るのを職とし、陶器作内人のつくるべきものに御比良加があげられている。

皇太神宮儀式帳のははつきりしないが、先の二つは天平賀とはつきりむすびついた職掌でかつ世襲のようである。

はつきり書いてある方が鎌倉期の著書で、ぼんやりしているのが平安初期のものではあるが、猶天平賀にかかわる神宮奉仕の部の如きものが上古あつたと考えられもする。

住吉神社神代記にも天平瓮を作つてその神を祭りはじめたと記されているが、倭訓栞には住吉の神事にあづかる女子にひらかの称がある。平瓮より出たる事というとある。その称が上古よりつづいたものであれば、ここにもひらふの如きものがあつたかもしれぬ。

猿田彦神がかかる名を負う貝に殺された事は、単に貝にころされたと言うより意味深い事だつたであろう。

又肅慎征伐にあつた阿部比羅夫の名もひらふである。

さきの敢貞元の敢は阿部と同じと思われるので（阿倍氏の祖の大彦命を祭つてあるのに伊賀国敢国神社がある）、阿部比羅夫の名は氏と名が相互にゆかりあるものよりなつている事になる。皇太神宮儀式帳には阿倍武淳川別命が倭姫命の御送駆使として天照大神の御鎮座ましますべき土地を求め旅立たれたのに御仕えしているとある。又その時阿閑拓殖宮に一時座したとある。其他神宮にゆかりある氏である。

阿倍比羅夫の名は阿倍氏が神宮とゆかりある事を考え神宮祭祀に重要な意義のある天平賀部の名を付けたのかもしれないが、或は阿倍氏で天平賀に関わる仕事をしていたという意味の名かもしれない。

或いは神宮を中心とする信仰の体系を蛮夷の地にしく人の名に、天平賀部というのがふさわしく、又国つ神の代表の猿田彦神をくい殺した貝の名が野蛮人討伐にふさわしかつたのかもしれない。その様な時代の時代精神を反映している名だつたのであろう。

## 西 寒 多 神 社

延喜式卷十豊後国大分郡西寒多（傍訓サムタ、ササムタ）神社、及び相模国足上郡寒田（サムタ）神社の寒多、寒田はサムタとよませているが、ムはルに相通ずるのでサル田即ち猿田ではあるまいか。

駿河の如き、又角鹿（敦賀）の如きは、ン、ヌガルになつたのであるが、ルガムになつた例もある。和名抄伊勢国安濃郡建部郷の注に太介無倍（タケムヘ）とあるが、この建部の建は倭建物の建で、タケルと元来言つたと思われるので、この郷名のムはルから変つたのだと思われる。



豊後国の寒多は、日本書紀景行巻にある景行天皇が征伐し給うた豊前国直入県禰野の三つの土蜘蛛の一つである打媛の媛より出ているのではあるまいか。

打媛の打は日本書紀の傍訓ではウチであるが、ウツではあるまいか。打でウツとよめぬ事は無い上に、ウツ、ウチは相通じ用いられている。

例えば、藤原冬嗣の父で弘仁年間に死んだ藤原内麻呂はウツマロとも言い、ウチマロとも言った。伊賀国玉滝村内保（今ウチホと言う。平安遺文（東大寺文書）に見えるがよみ方は分らぬ）に宇都可神社（式内社）がある。この内と宇都は同じ名と思う。この内＝ウチと宇都は相通じて用いられていたのだらうと思う。或いはこの内＝ウチは元来はウツと言ひ、後ウチに変わったものかもしれぬが、藤原内麻呂と並べて見ると平安時代に相通じ用いていたのが後世固定したのであろう。

このウツは全、珍、美の意で美称である。

西寒多の西＝サも真の意で美称であり、結局は打と同じに使われているのでは無いかと思う。

大国主命が帰順された後に出雲国多芸志の小浜に天の御舎を造り御かくれになり、その御舎が神社として後に残った事は、帰順の民の元来信じていた神がひきつづいて祭られた事の例なのであろう。

この打媛は反抗の後勝てないと思つて帰順を請うたがゆるし給わなかつた。そこで自ら身を谷に投じて死んだと伝えられている。つまり帰順したのでは無いが、後程その神社を祭る事を許されるに至つたのであろう。

西寒多神社は貞観十一年三月十六日に今迄無位だつたのが、従五位下を授けられている（三代

実録)。延喜式では大社になつて居り、後には豊後の一宮となつた。

地方民の尊信次第に集り重視されるに至つたものであろうか。

今大野郡犬飼町に大寒、西寒田の地名があり、大分郡大分村にも寒田がある。神祇志料によれば、大分郡野津庄三郎郷寒田村に西寒多神社の旧祠があり、大分郡植田郷寒田村に新祠がある。大分郡の寒田が植田郷の寒田に当る。此等の寒田等の寒は皆猿であろうか。

日本民俗学会報二八号山岳信仰の分布からみた中世修験と近世修験(松田実氏)に大分平野の靈山を祭つたのが西寒多神社だとあるが、靈山は大分平野に突出した山である。

今の直入郡は大野郡の上流をしめていて、大分郡とは間に大野郡がは入りかなり離れているが北海道学芸大学紀要第十一巻一、二号拙稿、古代に於ける神社の研究で論じた如く、大分(碩田=オホキタ)、大野(オホノ)の大は多氏の多であつてキタはその分国の意である(肥後国の葦北郡も似た名である。)ので、豊後国が大和勢力に服属するに至つて、新たな政治地理的区分が出来て、その結果出来た名であろうから、大和へ服属する以前には直入の地は大分、大野両郡の地をも占めていたのではあるまいか。(直入はナホリで場所が変る意味や曲つたのをためて正しくする意味があるので、大和朝廷に帰順した後帰民の置かれた県に新たにつけられた名なのかもしれぬ。それでも後直入県に住んだ人達の居た地方位の意味に直入県がつかわれたのかもしれない。)

禰野(ネギノ)は豊後国風土記にも見えて居り、直入郡の相原郷之南に在ると記されて居り景行天皇が兵衆をねぎらい給うたので、禰野と言つたのであるとされている。

豊後国風土記に出ている所の此等の部分について、日本古典文学大系風土記で秋本吉郎氏は、文章も日本書紀景行巻に近似して居り、一括交錯させられた記事(恐らくは景行紀)を材として筆録したものと認められ、禰野等の地名は筆録当時すでに所在が明らかで無かつたのであろうとされている。そうだとすれば必ずしも直入郡にとらなくてもよい。かつ禰野とはねぎらう意味では無く、ぬぐの一般的な意味つまり祈の意味で、禰野は宗教的な行事の行なわれる野ではあるまいか。景行紀には禰野と共に禰山が出ているが、禰山は信仰の対象の山の意であろう。松田氏によれば現在その様な信仰の山が大分県下には随分あるらしい。その様な禰野に宗教的行事のある時には集る三つの土蜘蛛の一が打猿だつたのであろう。かく考えると禰野、禰山は大分郡の靈山及びその周辺にとつてもよく、靈山をめぐるつて祭られてきた西寒多神社の寒を打猿の猿とむすびつけてもよいかと思う。

日本書紀景行巻には筑紫後国でも水沼原主猿大海が天皇の間に答えて山中に八女津媛がいる事をお知らせしたと出ている。そこで八女国の名が始まつたのである。この猿大海の傍訓はオホアマ又オホミであるが、オホウミと言つたのをそう書いたのではあるまいか。九州ではオガウと発音される事があるので、大臣の意味のオホオミがオオウミと発音され大海と書かれたのではあるまいか。

そして道案内している所は次に述べる猿田彦神と似ている。

豊後国の打猿ひいては西寒田神社=真猿田神社は筑後国の猿大海とも並べて考えられる名であらう。

又寒多=寒田=猿田は猿田比古とも結びつけて考えられる。

猿田毘古神は天孫降臨の際途中迄出迎え、天宇受売命と問答した。その天宇受売命は猿田毘古の名を負うて、その子孫の猿女君等は其の女を猿女君と言う様になつた。この猿田毘古は道案内の神である。日本書紀では衢(ちまた)の神である。日本書紀では猿田毘古は天孫の降臨すべき所を御教えし、自らは天宇受売命に送られて伊勢に行つた事になつている。かくて天孫が高千穂

峰について、喜田貞吉氏は日向国史で「後人之を地理上に求めて、或いは祖母山となし、或いは久住山となし、或いは霧島なりとす。今にしてその確証を得んことは、到底之を望むべきにあらず。」とし、豊後、日向の国境の祖母山は日本紀所引一書の高千穂の添山の添の古名を伝えて居り又豊後国の久住山は日本紀の高千穂の櫛触峰の櫛触、又は櫛日峰の櫛日の旧称が残つているとも考えられるとされ、又阿蘇郡の高千穂かもしれぬとされた。豊後国には山岳信仰の対象とされている山が多い。猿田毘古はなぜその様な地域を指名したか、或は指名する神としてなぜ猿田毘古がえらばれたか。

記紀の書きぶりでは、先から猿田毘古神が伊勢にいたのでは無く身をさけて伊勢に行つた様に見える所がある。高千穂峰をめくり、猿田毘古神が何か関連を持つていゝのでは無いかと思う。

前記大寒の地をオウゾウと言うが、ゾウと言うのはサムが変つたのであろうか。寒は一方では祖母山、襲=添に連る事を思わせる。更に襲に類似の地名、人名を日向国史に多くあげて居られるが、古事記には出雲の石碕の曾の宮があり、又大和北部の沙本があり、又日本書紀に新羅を曾戸茂梨と言つているのも、その曾は襲にゆかりがあるのだと言えぬ事も或いは無いであろう。

此等皆猿に連がるのかもしれない。此等の地域は皆夫々に辺地である。喜田貞吉氏は襲は背の意で「一層原始的の俗を存して、主として狩猟によりて生活するが如きものは、更に退いて山上の高処を求め、ここに住居の地を定めしなるべし。是れ所謂山人にして、蓋し隈人に対する襲人なるものか。」として居られる。猿田毘古命はその様な辺地の神或いはその様な辺地に行き交う神だつたのかもしれない。

又相模国の寒田神社は東海地方から関東地方へ峠を越えて行く所に、つまり足柄峠近辺にあり道案内の神、ちまたの神の祭られる場所としてはふさわしい。

相模国の名そのものも前に論じた如く猿神の意ともとれる。すると寒田=猿田は猿神の田の意味になる。

式外神名考上に足上郡の相駿堺に蛤坂峠があり古祠が祭られているとあるのは、猿田彦が比良夫貝に手を喰ひ合されて死んだと言う説話に何かしら関わつているのかもしれない。

庚申塚が道祖神とゆ合している地方があるが、庚申の申から猿を祭るのは別に、ちまたの神、道案内の神、堺の神として猿が祭られて居り、両方猿を媒介としてむすびついたのであるまいか。(日本社会民族辞典)

柳田国男氏の山宮考に、敵島で秋より春迄入山を禁ずるのを猿の口どめ、猿の口開きと言うとあるのは、猿のこのような機能が出ているのではあるまいか。

又堤防を猿尾と言うのも、猿が番をすると言う意味かもしれない。

打猿の打は、或いは孝徳紀に、百済を内宮家という内、延喜式、皇太神宮儀式帳に皇太神宮の神職の一種を内人といつている内と同じかもしれない。或いは雄略紀に山背国内村(今綴喜郡有知郷村)にある内と一しよかもしれない。この場合、孝徳紀の傍訓には内ツとあり此はウチツとよませているのだし、延喜式にはウチツと傍訓があるのでウチとよむ方がよさそうである。この場合内とは皇室直かつ位の意味であろう。宮家の方は三つよりの綱でむすばれているという言葉が後について居り、内人の方は皇室の御先祖を御祭りしているので、皇室と特別の関係がある事になる。!

打猿の場合、天皇に帰順を願ひ出でて許されず亡されたものであるから、その意味の内の猿ではおかしいが、同じく並べられている国摩侶の方の国もくにとよむ時郡即ち楽浪郡等の意味であり、或いは国造の治める国の意味で、蝦夷の住む日高見国と言つた使い方もあるが、元来は開化

された地域の土地、人民の意味で、国摩侶はその様な国にかかわりのあるつまり郡にかかわりのある、或いは国にかかわりのある、或いは開化された土地の人民の意味であるし、少なくとも文明地域の人名と何ら変らぬ名であり、それはもう一つ並べられている八田の方も、仁徳天皇の妃八田若郎女、その御名代の八田部等の文明地域で使われている名で、野蛮人らしい名では無く、これら三つの名は元来野蛮人と打ち果されたものでは無く、後になつて豊後国内の土蜘蛛征伐の物語にその名がむすびついたものであろう。

(皇太神宮儀式帳に荒木田神主等の遠祖は国摩大鹿嶋命の孫だとあり、この国摩と国摩侶と関わりのある名とすれば、国摩侶とならんでいる打猿の打と皇太神宮の内人の内との関連を推測せしめる材料になる。国摩侶を国+摩侶とすると摩侶はもつと後世にいたり使われ出した言い方なのでやや異様であり、国摩+侶とみる方がよいのかもしれない。この場合国楯をくずと云うのであるから、国摩はくまとよみうる。くまとよめば熊襲の熊ともなり、又漠然とした辺境の意の隈にもとれる。又八田の方も伊勢神宮の八尺の鏡があり、又草薙大刀を元来もつていた八俣大蛇もヤマタ→ヤアタマ→頭八咫(鳥)=ヤタ(鳥)とむすびつけられましょう。神宮にゆかりある名である。)

そうすると打猿は皇室に仕えていた皇室と関連深い猿という意味になり、内人とよばれ、又猿田毘古神の子孫と考えられ、その氏神を申の日に祭つた伊勢神宮の神主と何かゆかりありげな名となる。

天孫降臨の際猿田毘古神が天孫の天降ります地を御教えした後、その先導をせず伊勢に行つたと言うのは、やや不思議な話であるが、元来の居住地をさけて、他の所に行つたのだと思われるふしもある。

そして天孫降臨の地は豊後国と言う説もあるのであるが、此等を考え合せて見ると打猿は猿田毘古神とゆかりありげに見える。

もつとも伊勢の内人も百済の内宮家も打猿も皆ウツで前述の意味だつたのかもしれない。内をウツともウチとも相通じ用いていたのでそうともとれるが、皇室の意のウチだつたのかもしれない。

古事記伝八には内抜王香久山之真男鹿之肩抜而の内抜をウツヌキとよましめ、内は借字にて、書紀に全剥此云宇都播伎とある全と同じとしている。此所では珍等の意のウツであろう。

珍の意味でいつていたのが、ウツ、ウチ相通ずるので内人等はウチと借訓を付せられる様になつたのかもしれない。